

をあまり出さず(薄く)に削り上げ、白砥粉を塗る。乾いたところで粉をとり、桐材の場合、うづくりで擦り上げ最後に木賊(とくさ)で艶を出して仕上げる。杉材の場合、トヨシミの根、又は米糠(こめぬか)をよく煎り上げ、油の出た粉を袋に入れて磨き上げる。

- ◆磨き丸太には、その形状、製作の方法、用途等によって多数の種類がある。丸太は毎年11月～1月にかけて山出しをする。材木屋の小屋にて外皮を取り去り、洗い場の水槽に入れ、十分に水分をふくませる。次に川砂にて丸太のあま皮を取り去るが、取れないところは竹篋で丁寧に取り除き、再び川砂で全体を磨き上げ、小屋の中で陰干(寒干)にして干し上げる。洗い上がりは濃黄色で、すばらしい艶が出てくる。絞り丸太も同様の工程で仕上げることになる。
- 人造絞り丸太。～20年ほど育った若木に立木のまま、割箸を外皮の上に色々の形に当て柿板やクリブ鉄板等にて包み、その上からつたやかづら、鉄線で締めつけ、人工的に絞り丸太を造るのである。締めつけてから10年ほどそのまま置いて製品となる。一般の床柱として多く用いられている。
- 天然出絞り丸太。～丸太の肌に小さく出たり入ったりしている丸太であるが、並丸太の中から1～5%位出るか出ないかのものである。外皮を取らないことには絞の有無は分らない。こうしたことから、目通り3寸長さ10尺もので、そうとう高価な値になるものが多い。
- 並丸太。～数寄屋建築の柱や化粧軒桁として、また茶室建築にも用いられる。四畳半以上の座敷では面皮造りとして柱に用いる。面皮造りとは、一般の押角状に四方に面皮を付けることであり、座敷の広さによって柱の大きさ、面皮の大きさを決めていく。四畳半の座敷であれば3寸～2寸8分角程がよいと思われる。この場合、面皮の大きさは1寸～8分までがよいと考えられる。
- 海布(かいふ)丸太(台杉小丸太)。～台杉とは、1本の原木から多くの枝が出て、これから磨き丸太の苗木をとるものであるが、この枝を磨き小丸太としたものである。多く化粧垂木として用いられている。台杉はまた庭木として多く庭園に用いられている。
- ◆北山磨き丸太・吉野磨き丸太。～北山磨き丸太は京都市右京区高雄より中川郷方面に産するものは特に優れている。多くの地域でも植木されてはいるが、同様のものは出来ないようである。吉野磨き丸太は奈良県吉野地方に産する。北山磨き丸太と比較すれば少し劣るものがある。末の方にやや小節があることと、艶の点で少し劣ること、年輪もやや荒い点がある。丸太の肌の色艶のよさと冬目が細かいことが基準といわれている。
- ◆赤松皮付丸太。～各地より産し多く床柱として使われていた。山出しをして上皮を取り除き次のあま皮をたわして擦って艶を出す。その後は小屋で1年程乾燥させて製品化する。しかしこうして造っても松喰い虫がつき易いため4～5割程度しか出来ないといわれ、高価なものとなるが、虫がつかない製品には、